

---

# 魂のフミル ~ 序章 ~

影法師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魂のフミル ～序章～

### 【Nコード】

N5454D

### 【作者名】

影法師

### 【あらすじ】

怪しい猫に誘われて、異世界にきてしまった空。記憶をたどって、自分の行くべき道を進む！

## ブローグに似て非なるもの（前書き）

この作品は初投稿で、しかも直したいところをめんどいという理由で直しておりません。なので相当酷い出来映えとなっております。　　こんなだめだめな作品でもいいというかたはぜひとも読んでください。お願いします

ブローグに似て非なるもの

風が一筋通り抜けた。

おれはだれだ？

ここはどこだ？

なぜここにいる？

おれはなにをしていた？

疑問がどんどん溢れてくる。

うーん、おれらしくないな。

こんなに考えるなんて。

少年は自分のことをよく理解していた。だからこんなに考えている自分に驚いていた。

そう、自分の性格はよく理解しているのに、自分の名前、出身、成り立ちは一切覚えてない。

まあ、とりあえず落ち着こうと、少年は深呼吸を一回。

ああ、新鮮な空気が頭をさっぱりさせてくれる

よし、ここにずっといてもなにもわからない。とりあえず歩こう。  
この世界には太陽らしきものがあるから、それを目印にして進む。  
う。

少年は大変楽観的であった。

その性格が少年を助けていた。

普通なら今ごろパニックになったりしていただろう。

少年も始めこそはパニックになったものの、深呼吸一つで平静を取り戻した。

少年がもつ恐るべき才能の一つである。

だが、歩き出したことで、運命の歯車はまわりはじめる。逃れることはできない、後戻りさえ出来ないシビアな世界に少年は足を踏み

込んだのだ。

いや、歩き出さなくても、少年の運命は変わらなかったのだが。

さて、そんなことは露知らず。

少年は太陽なるものを目印にただ進む。

目の前はただ草原がひろがるばかり。なんとなく体が軽く、ジャンプをしてみると高く飛べる。　どうやらここは地球ではないようだ。

地球？

そうだ、俺は地球にいたんだ。

少年の中で記憶が静かに目覚める。

俺の名前は空。有賀空。東京に住んでいて、高校生で、成績は普通で、運動はできるほう。

彼女はいなくて、好きな人は俺の席から斜め左の女の子。

家族は両親と妹の計四人。

喧嘩もしない、近所からは評判はよかった。

そうだ、思いだした。

今朝、本屋で毎週買っている週刊の雑誌を買いに行ったときに猫がいたんだ。

その猫は首輪に付いていた鈴を鳴らして、神社に走っていったんだ。

不思議な音色の鈴に誘われてか、俺は無意識の内に神社にいた。

そこには、妙齡の女の人立っていた。顔は上半分がベールで隠れていて、よくわからなかったが、鼻元、口元、輪郭だけで相当な美人であることがわかった。

服装は、真っ白。肩から垂れる髪も真っ白。袖から覗く肌も真っ白。

俺は不覚にも彼女に見とれていたら、不意に、彼女は顔を上げた。

ボールが自然に外れ、赤みがかった瞳がこちらを見ている。

その純粹そうな瞳を見ていたら、全てが吸い込まれそうな危機感を覚え、俺は視線を地面に落とす。

・・・

沈黙を破ったのは、彼女の小さい、でもよく通る声だった

「助けて・・・・・・・・」



「えっ？」

困惑した。

それも無理もない、いきなり見ず知らずの外国人見たいな人に、話しかけられて、それもいきなり

「助けて」って……意味がわからない。

俺はどう返事を返せばいいのか、苦悩していると、さっき聞いたばかりなのにどこか懐かしい不思議な鈴音がじだに響いた。

俺は落としていた視線を音色が聞こえてきた方向に向けると、そこには先程の猫がいた。

さっきは気にもしなかったが、この猫の毛色も綺麗な真っ白だった。普通の猫のように四つん這いになっていたが、急に立ち上がり、後

る足だけでたつてみせた。

俺は少し動揺したが、この猫なら当然のことと、根拠のない確信をもったため、さほど驚かなかった。

そんな根拠のない確信を持たせるほど、この猫のオーラはただならぬものであった。

猫は言った

「君は選ばれたんだよ。姫は君に助けを求めているにや。どうするかは君次第だよ」

舌足らずの日本語で意味不明な発言。

えっ？ちよつ、意味がわからないんですけど。

姫って？

選ばれたって？

助けて？

それ以前なんで猫が話している？

「悩んでる最中に悪いが、もう時間がないんだよ。ゲートが閉じる

前に戻らないと・・・」

猫が緊急そうに俺に言う。

時間がないと言われてもなあ。なにがなんだかわからないし。

「くるのっ!？」

そんな問いに頷いたかもしれない。それほどの小さな頷き。

正直興味が沸いたのだ。

恐らく姫は、あの真つ白な美人さんのことで、その姫を助けるとかいうシュチュレーションに心が動いたのだ。

姫を助けるという、誰もが憧れる役に自分になれるかという期待に胸が膨らんでいたのだ。

「よし、それじゃアルマニアにいくよ。地上についたら、ひたすら北に向かうとバクという町につくんだにや。僕たちはそこで待つてるから。」

「えっ、なんていった!？あんまよくきこえなかったんだけど・・・  
・・・って、うわ!!」

俺が問うた殺那、足場が雪崩のように崩れ、実体の無い水溜まりのような場所に頭から突っ込んだ。  
そこから意識はない。

んで気がついたら、ここにいたわけか。

状況を把握した空は、とりあえず北へ向かうことにした。

・・・つ、

「北つてどつちだよおおおお!!」

地平線に叫んだ。が返事はくるはずもない。

勿論、コンパスなど持ち歩いてはない。

(たしか太陽つて、東からのぼって西に沈むんだっけか)

幸いここには太陽らしきものがある。

ちゃんと、太陽が(を)公転していれのか確かめるべく、青空を見上げる。

先程見たときよりも、少し上にきている。

## ブローグに似て非なるもの（後書き）

どうも影法師です。この終わ리카たは無理あつたかもしれません。  
正直無理やりでした。めんどかつたんです。続きを作る  
つもりなのでそちらのほうもごひいきにお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5454d/>

---

魂のフミル ～序章～

2010年11月2日03時35分発行